

大阪外国語大学

## 南十字星

インドネシア語  
同窓会

2007年春 第4号

発行 大阪外国語大学南十字星会  
連絡先 大阪府池田市五月丘2-5-113-402  
電話 072-753-1693  
Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp私の Indonesia

## 今 ASEAN 盟主への復活を願う

西田 達雄 ('60卒 大8)

《1565年某月某日》

日本とインドネシアの関係を辿ってみると、1565年に日本人8人がポルトガル船で西ジャワを往来したとの記述が残っていると聞く。鎖国が解かれた後は往来さらに活発になり、明治42年に日本領事館、大正2年日本人会、大正14年日本人小学校が設立されるなど記録されている。

不幸な第二次世界大戦中日本軍による占領支配もありましたが、インドネシアは極めて親日的なお国柄で、彼地で生活された方々は異口同音にその日々を懐かしく語り、インドネシアの奥深さや人々との出会いを話題にしております。例えば、彼地に縁ある人々の集まり「Tokyo-Jakarta 会」は都内で年2回盛大に開催されています。インドネシアに滞在されたご婦人方による人気あるコーラスグループ「スアラ・ファンタシ&コール・フローレス」は各地で活動を続けておられ、草の根的に日-イ関係強化に寄与されています。

《1961年3月22日》

建国の父、独立の闘士スカルノ大統領統治下の首都ジャカルタに私が第一歩を踏み入れたのがこの日。若輩23歳の春である。

1960年3月大阪外大インドネシア語学科を卒業し、住友商事(株)入社1年未満での赴任。爾来度々の駐在を重ねること14年間、彼地でお世話になった次第。JALのプロペラ機で深夜羽田を発ち、香港に向かい シンガポール ジャカルタと乗り継いだ。不安一杯で、当時地の果てとまで言われたジャカルタ入りは、今尚鮮明に記憶に残りつつも、時は流れ、既に半世紀を刻もうとしている。

1955年のバンドンでの「アジア・アフリカ会議」は片田舎の無垢な一高校生を触発して、躍動するである

う世界に身を置くことを運命付けた我が道は、今振り返れば、半ば

達成されたとしても、相次ぐ天災・人災続出の「INDONESIA の今」に心痛む昨今であります。来る2008年は日・イ修交50周年記念として双方で記念行事が盛大に予定されており、若い世代を中心にさらなる多層的な両国関係強化を願っております。

《1974年1月15日》

それは私自身にとり一生涯忘れられぬ日として、右手中指の傷跡とともに心に残る思い出。この時私は3度目のジャカルタ駐在であったが、当日市内は騒然としていた。事務所からの帰途回り道をしたにも拘らず、田中角栄首相(当時)訪イに反対し、荒れ狂う反日デモの一団に遭遇。じっと見守る無数の大衆雑踏(当時100万人の見物)、小型のコルト車でさえ前に進めず、後にも引けず。そんな中で、中高校生を中心とする集団に車を取り囲まれ、揺さぶられ、大きな石で窓を壊され、指には鮮血が流れた。諦めて下車すると即座に車は反転され、無惨にも焼かれてしまった。身の危険は感じなかったが、大好きなインドネシアで何故こんな酷い仕打ちに出会うのか。偶然としても至極残念な気持ちだった。そして、それ以来途上国の若い世代と日本企業・日本人との結びつきを盛り上げねばと、日々漠然と意識するようになった。

現在では海外での日本企業や日本人のBehaviorも大きく変わり、概して高い評価を得ています。グローバル時代であっても、私は他人の庭を借りての企業活動であることを忘れずにと今後も訴え続けていくつもりです。



《1990年7月25日》

5度目のジャカルタ駐在を事務所長としての任務を終え、彼地を後にした日である。長き歳月を刻んだジャカルタ生活だったが、その最後に相応しい充実した2年間。前半は日本人学校維持会理事長として子供達に直に接する機会も多く、異国で力強く育つ彼等を頼もしく感じた。後半はJJC (Jakarta Japan Club) 理事長として、インドネシア各界の幹部との交流を重ね、幅広く議論を交わした。その時の人脈の一部は今尚綿々と続いている。この時、幸いなことに事務所を託す後任者はバグダッド所長から転任する、気心知れた同窓同級の滝本佳一兄(インドネシア語科'60年卒)であった。帰国に先立ち、滝本所長と相談して、恒例の所長交代披露 Party を取り止め、その経費を全額インドネシア学生奨学資金に振り向けることとした。後日新しく教育財団 "Yayasan Summit Cahaya" が設立され、歴代の所長がこの方式を継続。既に5,000人以上の学生に奨学金が給付されており、彼等が幅広く各地で活躍しているであろうと時折 滝本兄と語り合いながら、当時の上司の決裁にも感謝している。



Indonesia 大学の Usman Chatib Warsa 学長<sup>Ⓞ</sup>とは旧知の仲。  
Ⓞは友人の鈴木氏=07年1月17日、懇談した学長室で

昨今では多くの進出企業は各々のやり方で人材育成に協力し、彼地での社会貢献も幅広く行っております。私も長年の夢であった「人造り」の一端に参加させていただき、日本 - インドネシア両国の絆がさらに強まり、広がることを切に願い、現役を退いた今自らにもさらなる努力を課していきたいと考えています。

《2007年2月4日》

本紙編集長の求めに応じ、本稿の仕上げを急いでいる。

日々変化に富んだチャレンジングな 42 年間の商社マン生活を退き、既に5年が過ぎようとしている。現在(株)きんでの非常勤顧問、(社)世界貿易センター常任理事等を務める傍ら、私は、設立以来半世紀の歴史と伝統を誇る(財)日本・インドネシア協会(会長・衆議院議員 福田 康夫氏、法人会員 90 社、個人会員 300 人で構成)の業務を手伝っている。そして、日本 - インドネシアの広範囲な関係強化を目指し、民主化された国造りに進むインドネシアの着実な発展を願って、微力ながら内外関係者との協力の下、引き続き歩を進めて参りたいと思っている。

Aceh 津波被害への募金をいただいた中に、Sumatra

各地に駐屯された旧日本軍兵士の各々の戦友会から多額の浄財が寄せられました。その贈呈式には高齢の代表者が在日インドネシア大使公邸にまでご一緒いただき、関係者一同感激的一幕もございました。

昨年 11 月には国賓として訪日されたユドヨノ大統領一行の歓迎会を日・イ国会議員連盟と共催して、参加者の皆様には大統領と親しく懇談いただく機会を設けるなど、協会として活発な事業展開を行っております。

最後に Dr. H. Susilo Bambang Yudhoyono 政権につき私見を述べてみたい。

ユドヨノ政権は初めての国民による直接選挙(2004年)で

選出された大統領であり、国民の支持、期待は大きいですが、未だ十分にその実績を示すに至っていない。汚職追放を声高に訴えるが、司法の協力も十分でなく、その成果は容易ではない。相次ぐ天災・人災に見舞われて応急対策に追われ、1970年代の外国投資法の改正も2年以上国会で Pending となっている。強固な地盤を持たぬ大統領の

国会対策や自らの利益を優先し勝ちな国会議員に頭を痛めているのが現状である。

投資家が自由に国(投資先)を選ぶグローバル時代にあつて、ユドヨノ政権は内外直接投資を強力に誘致して、国民に就労機会をより多く提供し、国民生活の底上げをはかって貧困削減、地域格差是正に繋げてほしい。また、所得向上で汚職大国の汚名返上に漸次向かうことを期待したい。

世界第4位の人口 2.2 億人を抱え、イスラム教徒が9割近い多民族構成からなる「民主国家」インドネシアは、台頭する近隣の大国との競争にさらされ、内外共に極めて厳しい状況に置かれている。ASEAN(東南アジア諸国連合 現在 10ヶ国加盟)もその地位を相対的に低下させており、今強力 Leader を必要としている。一面では世界のブロック化が進む中、アジアの中の日本としても ASEAN の継続的安定と社会・経済の発展に寄与してゆくことが将来にわたり国益に適うことであろう。この点からも民主化進むインドネシアが、自らを再建して、ユドヨノ政権下において名実共に ASEAN の盟主として再び内外に Leadership を発揮する時期の早い到来を心から願っており、その実現を密かに確信している。

寄稿

Apa &amp; siapa

## 魅力を再認識

伊勢崎 昭弘 ('03卒 大51)

現在日系メーカーの営業部で働いており、港湾クレーン営業の東南アジア担当をしています。

高校卒業までは東京でほとんど野球ばかり。大学入学とともに大阪へ移り、積極的に外国へも出るようになりました。インドネシアを中心に長期休暇は必ず海外旅行をしていました。東南アジアはもちろん、インド、ヨーロッパ、北米、中南米と学生時代はいろいろな国へ行きました。

2001年にインドネシア大学の BIPA と呼ばれる外国人向けインドネシア語コースに参加。これがきっかけで、



1月に出張先のベトナムで

以前は旅行で訪れても余り惹きつけられるのを感じなかったジャカルタが、すっかり好きになってしまいました。

インドネシア人と同じ下宿に住んで、食事は毎日下宿の周辺にある食堂や屋台で。市民の足である電車やバスに乗って市内を移動。旅行では経験で

きなかったジャカルタの生活でした。日本で考えられないようなことがジャカルタでは起こり、それは自分にとって刺激的であり、とても魅力的なものでした。

気に入ったスポットがあり、すばらしい景色にもめぐり合える。社会人になってからも3日の休暇があればインドネシアへよく行っていたものです。もっとも最近はなかなかそんな時間も見つけられませんが。

仕事ですが、東南アジア担当と言っても、今かかわっているのはインドネシア以外の国々のケースが多いのです。シンガポール・マレーシアを中心に、タイ・ベトナム・カンボジア・フィリピンの案件を担当しており、対インドネシアはなかなかうまくいきません。コンテナ港



学生の頃、何度も行った Lombok 島北西の Gili Trawangan の夜。パリの海より澄んでおり、砂浜でウミガメに遭遇することも

として立地条件は良いのですが、資金不足が原因か、あるいは政府のやり方がまずいのか、大型案件はなかなか成功しません。

業務の流れは、引き合い プレゼン 入札 交渉 契約 契約履行となっていて、案件発生から終了まで全て管理していかなければなりません。だから自分の時間をつくるのも一苦労です。

シーズン中は会社の野球が毎週末ありますが、最近は海外出張と重なることが多いうえ、今はオフシーズンなのでやや運動不足気味です。「もうちょっとすれば仕事も落ち着いて自分の時間を見出せる」。そう言い始めて2年が経ちますが、相変わらずの日々を過ごしています。

東京に戻ってからは南十字星会関東支部の集まりに参加しており、定期的にある会合に参加し、諸先輩方と色々な話をするのは今の楽しみの1つでもあります。なかなかインドネシアに関する事に触れられない中、こうした会合は貴重なイベントになっています。

私にとっては、仕事の面はともかく、やはり「インドネシアが最も好きな国」なのです。



移動に便利。Tanah Abang と Ragunan を結ぶ市バス KOPAJA-No.19



## キャンパス便り

専攻語インドネシア語 教授 松野 明久

(外国語学部アジア 講座)

### ホームステイ

待ちに待った夏休み!というのは学生の話。私の場合、昨夏は、ジャカルタ、東ティモール、アチェ(津波被災地)、ボゴール(ホームステイ)、ジョクジャカルタ(地震被災地)と目が回るようなスケジュールで、ジョクジャでは最後熱を出して寝込んでしまった。

ワテスジャヤ村でのホームステイは今年で4回目。16人もの参加者があり賑やかだった。予約していた森林公園のログハウスが、到着してみたら、後から予約した大きな団体に取られていたというハプニングがあ



森林公園からの帰途、眼下の集落を背景に

った。しかし、森林公園からの帰り道、眼下に広がる田んぼや集落のおおらかな眺めにすっかり気も晴れた。それにしても今年は熱を出す学生が多かった。村の人のバイクに乗せて険しい坂を上り下りし、町の24時間クリニック(Dokter 24 Jam)まで運ぶ。だいたい他に患者はおらず、診察も早い。薬代もいれて6~7万ルピア(千円弱)。次回は体調管理を課題にしよう。

### アチェと中部ジャワ~被災地支援

「OGASA(大阪外大アチェ支援学生の会)」の諸君と8月末アチェを訪れた。OGASAの訪問は今回が3回目で、馴染みとなった小学校やNGOのインフォーマル教育の教室を訪問し交流活動を行なった。交流活動は、



ゲーム形式の日本紹介、サッカー、

ジャワの地震被災地は、まだガレキがいっぱい

末また訪問する。

中部ジャワ被災地支援は、インドネシア語2年生が中心となって集めた37万円の義援金を現地に届けようと、9月に中ジャワ州クラテン県のNGO「プルセプシ(Persepsi)」を学生たちと一緒に訪ねた。20年以上も続

いているマイクロ・クレジット組合の元気でたくましいお母さんたちや被災地の小学校の先生の話聞いた。一方、村はまだがれきの山。支援金は村の会合でその使い方を議論してもらった。夜、行われた会合にわれわれも同席したが、支援金は、住宅建設用の鉄筋を購入し、各戸平等に分配することに決まった。大きな額ではないが、みんなで意見を出しあい、議論して決めた結果だ。

このプロセスが「納得」の結果を生む鍵だと思う。夜の会合で出た手作りおやつがおいしかった!



㊤アチェの交流で、日本紹介ゲームをするOGASAのメンバー  
㊦NGO「プルセプシ」で被災地の様子を聞く学生たち

## 語劇、燃える

2006年度の語劇は、インドネシア大学講師で脚本家のモハマド・ユスフさんによる外大語劇用オリジナル脚本「戦争(Perang)」だ。さらに、ユスフさんには外大にお越しいただき、直接演技を指導してもらった。(これは南十字星会からの寄付によって可能になった事業で、この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。)

学生用にわかりやすい脚本をとお願いしたのだが、読んで見るとこれが難しい。バラタコダという設定も2年生には敷居が高いが、



金閣寺をバックにしたユスフさん

神の定めた運命の受容・悟りといったテーマの難解さが最後までみんなを悩ませた。例えば、それがユスフさんの意図だったのかも知れない。演劇をやる



語劇の戦闘場面。衣装もほとんど手作り

意味は、演劇自体と向きあい、演ずること=考えることであるようなプロセスなんだということ。ユスフ先生は「みんな役にはまるようになって、役が個性化してきた」と言った。輪郭がクリアになった役が舞台でお互い火花をちらす。そんな感じの舞台に仕上がった。今年は2年生全員参加方式をとり、衣装も多くは手作り。力の入った宣伝で聴衆も多かった。

教員たちはユスフさんを大阪・京都見物と宝塚歌劇団公演に案内した。芥川龍之介の「羅生門」の脚本化に取り組んでおられるということで、京都の羅生門跡にも行った。今では小さな公園に碑があるだけで門は残っていないが、模型などを見ながらイメージが明確になったとおっしゃっていた。インドネシア語版「羅生門」に期待しよう。

## 研究と仕事

4月に「アジアの過去と向きあう」という会議でベルリンに呼ばれ、インドネシア、東ティモール、韓国、カンボジア、アフガニスタンなどからの参加者と戦争・紛争後の取り組みについて話をした。そしてみんなで東ドイツ時代の諜報機関跡、ナチ収容所跡を見学した。とにかくどちらも凄まじい。とくにナチ収容所跡は見るべきものと思う。

10月には「東南アジアと人間の安全保障」というバンコクでの会議に呼ばれた。クーデター直後の奇妙な

ムードのタイで、東南アジア各国の現状が人間の安全保障という観点から分析された。紛争、汚職、貧困、人権抑圧等。この2つの会議は暴力の精算、暴力の防止という異なるフェーズに属するものの共通するテーマのもとにある。

私はと言えば、このところ9・30事件の「記憶」を追い、一方では東ティモールで平和定着のプロジェクト(JICA)をやろうとしている。直線的にはないが、繋がっていると思っている。



大阪外大アチェ支援学生の会(OGASA)新代表・岡本龍一(インドネシア語2年生)

「06年12月にバトンを引き継ぎました。メンバーは現在14人。新しい活動として、アチェの小学生と日本の小学生の間で手紙のやりとりをしてもらい、僕たちが手紙の伝達をするという取り組みを始めています。津波などで親を亡くした孤児たちを励まし、新しいつながりをつくっていく試みです。アチェをサポートする気持ちはどこにも負けないつもりで、頑張っていきます」

## インドネシアの家族愛

じゃかるた発



西森 潤 ( '95 卒 大43)

私とインドネシアとの関係は、遡ること10年前、社内留学制度でインドネシア大学(UI)留学という機会を得たところから始まりました。実は専攻が「フィリピン語」だったので、留学前の事前語学研修の際に、外大でインドネシア語講師をされていた柏村彰夫先生に“特訓授業”をお願いしました。そして現地では、同じUIに留学していた正真正銘「インドネシア語専攻」の妻(旧姓小椋、00年卒)と知り合いました。2002年に再度インドネシアへの赴任辞令を受けて、現在に至っています。振り返りますと、外大インドネシア語科を軸に、公私とも瞬く間にインドネシア一色となった感じです。

留学1年を含めてジャカルタの生活は計5年余りです。まだまだ“Sebentar”の範疇に過ぎません。しかし、この間にもアジア通貨危機、暴動、スハルト政権崩壊を経て民主化



が一気に進み、国民の直接選挙によるユドヨノ政権誕生と、インドネシアは大きく変わりました。特にユドヨノ政権では、幾多の自然災害にも真っ向から取り組む姿勢が見えます。05年10月に、石油に対する補助金の削減を断行したことで物価が高騰しました。それでも、暴動は起こらず、デモは平和的。インドネシアはあらゆる面で成長を続けているようです。

ただ、この地でビジネスに携わっておりますと、「民主化はまだまだ」という場面もしばしば体験します。相変わらず小銭を稼ごうと無理難題を吹っかけてくる税務署をはじめとした公務員。権利ばかりを主張するインドネシアのナショナルスタッフたち。「Minta、Mintaの文化だなあ」と、身の程も弁えずイライラすることも。

しかし、インドネシア国民の寛大な心には、「到底真似はできない」と感心を飛び超えて感動すら覚えます。中でも、一番敬意を表するのは、国民の家族愛と、他

人の子供でも心から接してくれる博愛精神です。

例えば、私たちが家族でレストランに行くと、ほぼ100%の確率でウエイトレスが「Boleh gendong?」と言っては、我が子を抱っこ。他のウエイトレスも集まり、輪になって子供の相手をしてくれます。何とも温かい光景ではありますが、「仕事の方は大丈夫なのかな?」と心の中で呟いております。

この地で日本のニュースを見ていますと、幼い子供を狙った事件や、自分の子供や親の殺害、イジメを苦しめた青少年の自殺などが多くて陰惨な気持ちにさせ

られます。一方、インドネシアでは都市部こそ核家族化が徐々に進んでいても、まだまだ大家族主義。家族に対する接し方は、古きよき時代の日本を思い起こさせるものです。

生後7カ月からジャカルタっ子の長女(4歳)も、メイドさん、運転手さんをはじめ多くのインドネシア

の人に可愛がってもらい、今ではインドネシア語を理解できるまでに成長しました。日本では小さな子供を連れて出かけるのは大変だと聞いていますし「できれば、長男(生後9カ月)がもう少し大きくなるまでここに居たい」と思っています。尚、当地での住居環境は私を含め大半の日本人が現在はマンション住まいです。先述のメイドさん、運転手さんですが、邦人社会では決して贅沢ではなく常識とされています。

こちらでの生活は、外大の諸先輩(社内にもインドネシア語科の先輩、雪本肇さんが赴任中)に囲まれ、公私にわたり助けていただいております。改めての絆の強さを感じています。秋には阪大との統合で大阪外大の名前がなくなることは、正直「残念スカリ」(在住邦人がよく使う混成語)ではあります。一卒業生としまして、新しくできる外国語学部の益々の発展を願うと同時に、自身もその一助になりたいと思う次第です。

(写真は、南ジャカルタの有名な果物市場 Pasar Santa の前で)

寄稿

Apa &amp; siapa

## 「探求と求道」

小原義男 ( '53卒 大1)

戦後の新制大学1期生として勇躍、名古屋から入学しましたのが1949年のことです。世は食糧難時代。工兵隊跡地の高槻学舎も木造で、大学の名とはかけ離れたものでしたが、大いなる希望を持ち、新しい外国語を学ぼうと燃えていました。

当時、兄が東京外語のスペイン語を学んでいて、随分感化されました。「お前は東洋語をやれ。東洋語なら大阪だ」「そうか、よし」という気になり、インドネシア語を選んだのです。当時教員陣は内藤春三教授、中西龍雄助教授とイスミル・ナチ

ール外国人教師の3人で、午後が専攻語でした。次々と新しい単語。懸命に覚えるのも楽しい毎日でした。校舎は上八に移り、語劇祭やオリンピック(運動会)にも参加。「南十字星会」も発足し、先輩からインドネシア滞在の話を聞くと、いつか自分も『南進譜』を口ずさんだものでした。

卒業後は故郷の名古屋に戻り就職、結婚…。仕事はインドネシア語とは全く関係ありませんでした。50歳になったとき、名古屋市内の外国語専門学校にインドネシア講座が開設され、講師担当の依頼が舞い込みました。恥ずかしくないよう猛勉強です。インドネシア留学生を探し求め、会話練習も。何とか個人レッスンをできる自信もつき、10年くらいそこで講師を勤めました。

縁は不思議なものです。今度は愛知県警察本部通訳センターから、インドネシア語の通訳をとという話です。「登録くらいなら」と気軽に引き受けました。それが現在ま



アラビックの授業風景。教壇に立っている後姿は中西助教授  
=52年6月、上八校舎で

で15年間続けることになるとは。外国人の就労・入国などのトラブルが起きる都度かけつける「司法の民間通訳」。早朝・夜間・曜日も関係なく、実は大変な仕事なのです。

“雀百まで踊りを忘れず”といいますが、語学は脳の活性化には一番です。この年齢(76歳)でお役に立ち、「ご苦労さま」と言われることに喜びを感じる近頃です。

今ひとつの人生は「尺八」です。

尺八は1300年ほど前に中国から日本に伝来しました。臨済宗の一派として、修業のための尺八演奏であり、一般には無縁でしたが、江戸時代に徳川幕府の特別な保護で、虚無僧尺八が盛んになりました。明治維新後、改革の嵐に飲み込まれ、一時尺八も存続が危ぶまれましたが、後年、楽器として尺八は、琴や三味線との合奏、民謡伴奏、さらには詩吟伴奏となるなど、幾多の変遷を経て来ました。そんな中で、古来の尺八道を復活させようという動きも出ています。

私が所属しています「西園(せいえん)流」は、虚無僧尺八を源流にしています。幕末に創設されて以降、連綿として受け継がれ、縁があって私がこの宗家五世を平成3年(1991年)から継承しています。尺八を手にして五十有余年。音色の神秘性・寂寥感・魂の揺さぶりに生涯、吹奏を続けて行きたいと思っています。

インドネシア語と尺八の関連性を問われると返事に窮しますが「探求と求道」と答えることにしています。日々是学習と練習です。これが毎日の心の支えとなり、気持ちの糧・ゆとりを生んでいると感じています。

(⑩の写真は名古屋城博協賛イベントの虚無僧行脚=05年4月)



## 寄稿

## Apa &amp; siapa

## インドネシアと私 佐々木 信子 (67卒 大15)

長崎西高を卒業して上阪、インドネシア語学科に入学したのは1963年。父が海軍の通信兵でマナドに出征し、幼い頃からインドネシアは良い所だと聞かされていました。母は中国・山東省の青島で女学校まで生活。専攻をインドネシア語か中国語かで少し迷いましたが結局、南の国を選びました。高校3年の秋、NHKテレビでミュージカル「バリ島への道」(大好きな童謡歌手・近藤圭子が主演)が放送され、これが専攻語選択を決定的なものにしました。

クラスに女子学生は1人だけ。4年生に祖父江啓子さん(大6)から数えて6代目の女子です。翌年、山田加代子さんと篠原和子さんが入学して、インドネシア語劇を上演できました。Utuy T. Sontaniの「Bunga Rumah Makan」(食堂の看板娘)歌手を夢見るアニの役でした。

ただ「歌えない」ので、夢のシーンには生バンドで歌手が「Bengawan Solo」を歌って下さる、何とも贅沢な語劇でした。衣装のサロンは布団屋で更紗模様の



④1966年の新入生歓迎会。正面左から松浦、中西(立って挨拶)、ナジール、松岡の各先生。⑤専修大LL教室ワークショップでの発表。言語の縁は続き、長く教壇に

布を買い求めました。会場は四天王寺会館でした。翌年は「Cendera Mata」を上演。また、天理大学のインドネシア語劇には花束を持って観劇に行きました。

恒例のリレーカーニバルは服部緑地。インドネシアの紅白旗を親戚のミシンを借りて作りました。赤と白の布地は、同じ幅のはずだったのに、赤が縮んで見えたことも懐かしい思い出です。それにしてもインドネシア語学科は強く、まとまっていた。

今もインドネシアの民謡をいくつも歌えるのは、当時扇町にあった国際学友会へ同級生と行き、インドネシア人留学生に習ったからです。語劇にも来て下さいました。

最初のインドネシア行きは1967年。バリ島で3カ月、日本テレビの「すばらしい世界旅行」の取材チーム(牛山純一プロデューサー、市岡康子ディレクター)の通訳兼助手でした。牛山さんから、デンパサルのS.B.Kamという

中華料理店で芙蓉蟹を食べながら貴重なお話を伺いました。ジャカルタでは、総領事館の長井二千代さん('36卒)のお宅でご馳走になりました。(ドキュメンタリー「ケチャのある村」は川崎市市民ミュージアム所蔵)

東京外国語大学大学院を修了後、松浦健二先生に京都産業大学外国学部の専任講師にひっぱり頂きました。結婚後の1971~1973年は、コロンボランの派遣で、ジャカルタの国立外国語短期大学の日本語講師、江口満さん(大9)も教えていらっやいました。帰国後は3人の子育てに追われていましたが、末の子が小学3年生の時に勤め始



めた専修大学の第二外国語のインドネシア語講師も、20年過ぎました。大東文化大学の文学部と国際関係学部、淑徳大学コミュニケーション学部で、学生たちに

インドネシア語を通してインドネシア好きを増やすのが自分の使命と思い、教壇に立ってきました。

インドネシア語を学んだ1960年代の初めは、インドネシアの情報が少ない時代でしたから、「東京オリンピックにインドネシア不参加」の新聞の記事の切り抜きや、インドネシア留学生協会主催の歌手・イフォのコンサートの半券などを大事に菜として使っていました。その反動で、現在はインターネットなどで知り得たインドネシアの最新の情報を、独り占めするのがもったいなくて、ホームページやブログで毎日発信しています。

(exblog ガドガド：<http://gadogado.exblog.jp/>)

これまでにご指導いただいた先生方、語劇でお世話になった先輩・同級生の皆様に感謝しています。ナジール先生のご二女ファリダさんと1995年にボゴールで、松浦先生のご長男健太さんには、2004年にジャカルタでお会いしました。

寄稿

Apa &amp; siapa

## 外大生ライフの思い出

森 香澄 ('06 卒 大54)

卒業して1年。生まれ故郷も住み慣れた大阪も離れ、現在、岐阜で旅行会社の社員として働いています。振り返ると、ふと「大学時代は良かったなあ」と思うことがよくあります。特別真面目にインドネシア語習得に励んでいたわけでもありません。留学はせず、留学生との交流もなく、あまり外大らしい学生生活を送らなかったかと思えます。それでも、あの土地、同級生たち、先生方と4年間過ごせてよかった、と誇りを持っています。

諸先輩の中には、箕面・間谷キャンパスに馴染みのない方も多いかと思えます。大阪大学との統合でこれからキャンパスの様子は変わるかもしれません。お話できるのは、私の在学中の外大生ライフ、特に間谷に下宿している学生の生活です。そのあたりを少しお伝えしたいと思います。

早朝、外に出るとニワトリが鳴いています。ネイティブのウガ先生が「ここで ayam を飼っているらしい、僕も飼いたいが、どこで売ってるのだろう？」とおっしゃっていたことを思い出します。登校は徒歩または電動自転車です。少し前までは原付(単車)ばかりで、電動自転車の学生はほとんどいなかったかようでした。私たちが入学した頃から原付の規制が厳しくなり、入構許可の

ない原付で登校しては守衛さんにロックかけられる。どこに駐車したら見つからないかと知恵を絞る日々。もっと“別のことに頭使えよ”という感じですが...

昼食は食堂で学食または生協入り口やB棟下で売っているお弁当でした。学食は混んでいるか



単車をとめて置く場所にもひと苦労...



お茶しておしゃべり。同級生の友人(左)と

ら2時限終了後に行ってもなかなか席が確保できないんです。何かのアンケートで日本一の学食に選ばれたこともある美味しい学食をどうしても食べたいからといってテイクアウトして空き教室で食べたことも。食い意地が張っていました。

下校時、間谷からの夜景はかなり綺麗です。近くはエキスポランドの観覧車、遠くはどこまで見えているのかよく分かりませんが、北大阪が一望できます。この夜景を見ながら何度矢のように過ぎ行く日々を切なく思ったことか。まったく進まない卒論を片手に、卒業できるかどうか何度不安になったことか。クリスマス近くになると、通学路のご家庭の素晴らしいイルミネーションを見るのも楽しみでした。

生活環境はこのような感じでしたが、講義に一切触れていないことから、私が勤勉な学生じゃなかったことが分かりますよね。

ところが最近、仕事を通じてインドネシアに関わる機会が出始めました。バリ製のインテリアを扱う企業だったり、東南アジア専門の旅行会社だったり...。初対面の方と話すのが苦手な私ですが、インドネシアという共通点で話ができて、お仕事を頂けました。Selamat malam や Terima kasih くらいしか使っていませんが、ちょっとインドネシア語の挨拶を入れるだけで仕事の電話もリラックスして話せます。

インドネシア語が小さな自信をくれたのです。仕事をする上での自信のひとつを大学4年間かけて作ったのだと思います。その経験は、今後も思わぬところで生きてきそうな気がします。諸先輩方には貪欲さが足りない、と怒られそうです。でも、今の私は大阪外国語大学インドネシア語科で過ごした日々の意味は、そんな風に考えているのだと胸を張って言いたいです。時が経つごとに、きっとまた違った意味を見い出せるのじゃないかなと思います。

## 2006年度 総会

## 歌まじえ和やかに



## 06年度総会

06年10月1日午後7時～  
新阪急ホテル

開会の辞 井上久生(大14)・司会  
黙祷  
会長挨拶 山口 寛(大6)  
来賓挨拶 松野明久教授  
Cut Meutia  
乾杯 荻田幸雄(専23)  
\*\*\*\*食事・懇談\*\*\*\*  
関東支部長 堀田 実(大11)  
現役生自己紹介  
特別公演 巽 明子(大54)  
幹事報告 浜浦義勲(大13)・行事  
岩谷英志(大12)・会報  
歌唱指導 渡辺重視(大12)  
閉会の辞 松木 優(大10)

大阪外国語大学  
南十字星会の2006  
年度総会が、10月1  
日午後7時から大阪  
市北区の新阪急ホ  
テルで開かれた。出  
席者は46人。

山口寛会長は、あ  
いさつの中で07年



10月の大阪大学との統合に触  
れ「同窓会活動にも大きな変化  
が予想されます。今後、語部の  
縦の繋がりはますます脚光を浴  
びてくるでしょう。会報が先輩  
から後輩への語りべ的存在にな  
っていくことを期待します」と  
強調した。

松野明久教授から大学の現状  
報告(統合の概略は11ペー  
ジに)。南十字星会がスマト  
ラ沖地震・津波(04年12  
月)で甚大な被害を受けた  
アチェ支援で、募金百余万  
円をアチェの「福祉女性技能センター」に復興資金  
として寄贈したが、その代表者のCut Meutiaさん  
ご夫妻が来賓として出席され、お礼を述べた。

卒業生の中で05年に歌手デビューした巽明子さん  
(大54)が、舞台上で歌声を披露。自ら作詞・作曲  
した『トモシビ』など3曲。東京の秋葉原などでのライ  
ブ活動が多いそう。アニメソング歌手から脱してレパ  
トリーを広げている。アーティスト名は「Suara」。

会食をまじえて語り合い、写真を撮り、歌を聴いたり、  
みんなで合唱したり。和やかな2時間だった。



## 消息

小泉正毅(専12)=兵庫県西宮市

91歳。同期は2人となりました。元気に頑張っています。

池永義啓(専18)=札幌市

懐かしい名前を拾いながら、投稿や短信の会報の生の声が楽  
しい。阪大との統合でどう変わるのか、気がかり。

藤原 剛(専18)=東京都港区

35年前、4年半にわたって毎日新聞ジャカルタ支局長をや  
りました。スカルノとスハルトの交代期。欧米の記者が騒いだ  
ような“革命”ではなく、東洋的な政権の授受でした。

三宅 勇(専19)=兵庫県尼崎市

05年に脳梗塞で入院。治療の甲斐あって延命、目下リハビリ  
中です。

浜田広一(専21)=大阪府豊能町

秋に統合。新生阪大の一大専門言語学部門として誇らかに活  
躍されるようお祈り致します。

荻田幸雄(専23)=兵庫県西宮市

入学した時はシンガポールを攻略して有頂天でしたが、卒業  
の時は敗戦の年で惨めでした。80歳になっても元気です。

西光一男(専25)=大阪市淀川区

腰痛で健康の有難さ一入感ず。古いことですが、平成10年  
「飛鳥」でアジア・クルージング。バグースでした。

奥田忠志(専26)=兵庫県西宮市

阪大との統合を目前に、ますます結束を固めたいものです。

原 勝利(専26)=千葉県佐倉市

新たに事業(探偵)を始め、忙しくしています。

宮川虹児(大6)=大阪府茨木市

板坂、大田中両氏のご健在に接し(第3号)懐かしく往時  
を偲びました。

中村英男(大6)=大阪府吹田市

総会で皆さんにお会いでき、楽しいひと時を過ごしました。

## ひとこと

## アチェからお礼に

Cut Meutia さんのご挨拶

(要旨)

皆さんにお会いできて、とても感謝しています。女性技能センターは最初、個人的に取り組み始めていましたが、そこへアチェの紛争に続いて大津波です。災害復興のため何とかセンターの建て替えをと考えていましたところ、日本から突然清々しい風が吹いてきました。JANNI を通じて、南十字星会から。私たちに差し伸べていただいた最初の援助の手です。

今、センターは活発に動き出し、その後うれしいことに支援して下さる団体も増えています。センターでつくった手芸品などが日本市場に流れるようになれば、すばらしいと考えています。この席をお借りしまして重ねてお礼申し上げます。

代表のムティアさん

## 阪大との統合 半年後に

大阪外国語大学と大阪大学は、半年後の07年10月1日に統合する。文部科学省の大学設置・学校法人審議会が06年11月30日に統合計画案を承認して本決まりとなった。

新しく誕生する大阪大学には、大阪外大の25の専攻語を引き継ぐ形で「外国語学部外国語学科」(08年度の入学定員580人、3年次編入定員10人)が新設される。現在のインドネシア語専攻も「外国語学部インドネシア語学科」(15人程度=未確定)になる予定。また、法学部に「国際公共政策学科」(入学定員80人)が新たにできる。この結果、1学部2学科が増えて計11学部24学科になる。

現在の阪大には学内共同教育研究施設が16あるが、統合に伴って「世界言語研究センター」「日本語日本文化教育センター」「グローバルコラボレーションセンター」の3センターが増設される。

大学院では文学研究科に「文化動態論専攻」、人間科学研究科に「グローバル人間学専攻」、言語文化研究科に「言語社会専攻」が新たに加わる。現阪大の言語に関する研究科としては文学研究科があり、主要な言語・文学についていえば、言語文化専攻、言語社会専攻、文学研究科の境界があいまいであるとの印象は否めない。

統合後、大阪外国語大学の名称や国際文化学科・地域文化学科はなくなり、教員の異動先も「研究科」ということになる。学生は統合後全員が「大阪大学学生」。入学後の教養課程は全員、豊中キャンパス(豊中市待兼山町1)で学び、その後各学部に分散する。専門課程は2年次後半からだが、外国語学部の学生については2年次の最初から。外大の夜間コースは廃止になる見通し。



## 消息

前田正一(大7)=神奈川県鎌倉市  
環境事業に関与し、現役半分。元気です。  
山下 進(大9)=京都府宇治市  
統合を機に、南十字星会一層の結束を!  
小原一浩(大11)=大阪狭山市  
06年7月にNPO法人「市民オンブズマン大阪狭山」をつくりました。第2の人生の新たな活動です。  
小杉 功(大12)=神奈川県鎌倉市  
06年6月に現役を退き、静岡から転居。  
勝原紀美代(大23)=広島県千代田町  
インドネシア語をもう1度学びたい...。  
中村由実(大26)=京都府宇治市  
統合は寂しい。会が永遠に続きますよう。  
平岡 毅(大42)=京都市山科区  
子供が2人。仕事も家庭も忙しい日々。陸上部時代の延長で週末はトレーニングも。

## ひとこと

《ジャカルタ支部》 現在37人。けっこう変動しています。未登録の方はご連絡を。07年1月末から約1週間、断続的な豪雨でジャカルタ大洪水(死者80人超)。天災・事故・事件が多過ぎます。それでもインドネシアは明るく元気!!(内原正司・大12 Eメールは uchihara@takeda.co.id)

《関東支部》 06年12月の支部幹事会で役員改選しました。07年4月から朝倉俊雄・新支部長に。(大15 Eメール asakurat@hkg.odn.ne.jp)

## おくやみ申し上げます

吉田駒夫(専17)  
=和歌山県御坊市 05年4月死去  
土井禮二(専20)  
=大津市 06年7月死去  
小巻 佐(専21)  
=奈良市 04年10月死去  
荻野 達(専23)  
=兵庫県芦屋市 05年10月死去  
長谷川元良(専25)  
=兵庫県加古川市 06年12月死去  
瀬田育成(大11)  
=三重県熊野市 05年死去  
家永陽一(大36)  
=大阪府富田林市 06年2月死去

## 投稿のお願い

第5号は07年10月に刊行の予定。投稿をお待ちしています。テーマ自由。原則1200字程度。カラー写真添付を。あて先は岩谷英志 Eメール rocky3@wombat.zaq.ne.jp

《住所》〒563-0029 大阪府池田市五月丘2-5-113-402

(Tel & Fax 072-753-1693)